

Title	研究会の参加者より
Author(s)	高井, るみ子
Citation	臨床哲学のメチエ. 1999, 2, p. 21-21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6148
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

特集：教育の臨床哲学

第1回研究会の参加者より

子供が不登校をした時、その現実が受け入れられなくて、まず頭の中はパニック状態になりました。

専門家といわれている方々の本もいろいろ読みましたが、どうも納得がいかなかったです。まともに読んでいくと、ますます親子とも追いつめられていくような気がしました。

”不登校の三つのタイプ”とか”母子密着”だとか”父親不在”だとか、最近では”IQが高くてEQの低い親”が原因だとか・・・不登校児10万人となった現在でも専門家はあいかわらず好き勝手を言ってくれます。

我が子のおかげで今まで見えてこなかった大事なことが、少しずつですが、まっすぐに見えてきたような気がします。

子供の不登校にはじめて”だいじょうぶだ”と自信がもてるようになったのは、東京シュレーの子供たちが書いた本に出会ったときです。題は『ぼくの色、君の色、自分色？』今、手元になくははっきり思い出せませんが、本当にいい本でした。読んだだけで、どの子供たちもいっぺんに好きになりました。彼らは、なんて表現すればいいんでしょう、人間くさい・・・というか、動いている子も、じっとしている子も、心の豊かさであふれている、そんな感じ

がしました。

それと、親の会は存在も大きかったです。会で出会ったお母さん、お父さんたちは、私にとって素敵な人たちでした。この人たちのどこが特別な親(?)なのでしょう。

不登校について一番よくわかるのは専門家じゃなくて、やっぱり本人と、その親なのではないでしょうか。

でも、世間の理解はこの専門家といわれる人たちを通してなされることが多いので、始末に悪いです。

仮に我が子が、昔言われていたような情緒障害、神経症、とか言われる存在であったとしても、親に取ったらかけがえのない存在です(不登校で起こるこれらの症状は、家族や社会が本人を追いつめてなってしまう、二次的なものであると、心ある専門家は語っています。またこの事実は当事者が実感しています)。

人の痛みと関係のないところで分析を行い、多くの偏見を社会に広げてしまった専門家といわれる方々の言葉とペンが、これ以上人を殺す事のないよう、心から願っています。

親の立場として、私が今一番語りたいのはこのことです。

高井 るみ子